



郡上市では、今年度から「小さな拠点とネットワーク」の取り組みを進めています。私たちの普段の暮らしを守り、地域のコミュニティを維持しながら豊かな社会を築いていくためにはどうしたらよいのでしょうか。今月号では、「これからも暮らし続けられる豊かな地域づくり」を目指す「小さな拠点とネットワーク」について特集しました。

「小さな拠点」とは：国においては、地域社会を支えるための仕組みを整え、暮らしの安心と未来の希望を育む拠点として定義しています。

「小さな拠点とネットワーク」 が目指す地域社会の姿とは

持続可能で豊かな暮らしを営むために

水曜日の午前中、「まめや」がな。寒うなったんな。」とお互いに気がかけ、近況を楽しく語り合う声が響くサロンがあります。明宝寒水地区の寒水掛踊伝承館で開かれています。

にぎわいの拠点づくりで 地域の課題解決

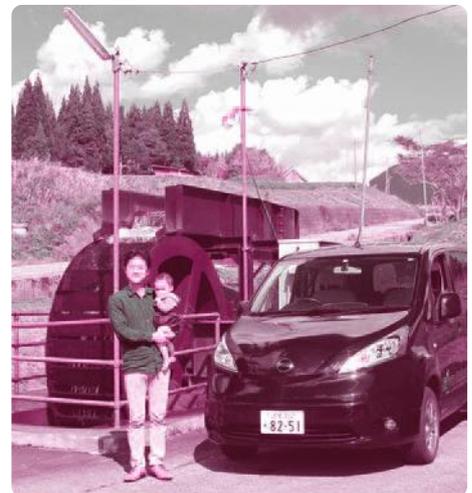
郡上市では、人口減少や高齢化が進んでいます。このことは、みなさんも実感されていると思います。こうした状況が進んでいくと、私たちの生活に必要なサービスや機能を維持していくことが難しくなります。自分が生まれ育った地域に暮らし続けるためには、地域のみなさんの主体的な取り組みがとて重要になってきます。地域の困りごとに対応する活動を続けていくことで、暮らし続けたいと思う地域のみなさんの願いを叶えることも可能になります。

本川榮子さんは、「私たちの小さな活動が、地域の中で大きなつながりを生みました。電動カートに乗って訪れるお年寄りも増え、やって良かったと思っています。」と続けること

る「かのみずわじまサロン」です。平成25年10月から毎週水曜日に一度も欠かすことなく、地元のみなさんに「気軽に集まれる場」を提供されています。このサロンは、寒水地区に住む60代から70代の女性6人が集まり、「地域のみなが気軽に集まり会話を楽しむ場をつくりたい」と自治会に提案し実現しました。毎回約40人、多いときは60人が利用する「地域になくはない場所」になっています。サロンでは、コーヒーやジュースの他、毎回工夫を凝らしたモーニングセットを手づくりしています。材料費分として「志」を募っています。サロンの運営を担っている本川榮子さんは、「私たちの小さな活動が、地域の中で大きなつながりを生みました。電動カートに乗って訪れるお年寄りも増え、やって良かったと思っています。」と続けること



サロンの日に合わせ、移動スーパーがやってきました。「集まる場づくり」が買い物支援につながりました。



地域に寄り添い、ボランティアで無料送迎を行っている廣中さん。今年度から電気自動車を活用しています。

平成25年に白鳥町石徹白地区に移住された廣中健太さんは、週1回、買い物や通院等が必要とする高齢者

意義を強調されました。最近、小さなお子さんをお持ちの若い女性のみなさんも多く訪れ、多様な世代間の交流も生まれています。さらに、サロンの開催日に合わせて、市内で移動販売を営む「いどうスーパーふくわらい」が食料品や日用品を提供されています。地域づくりを進めるためには、集落の中で人が集う拠点が欠かれません。「かのみずわじまサロン」は、寒水地区の実情に即して、「にぎわいの拠点」を生み出し、地域の課題解決につなげている好例と言えます。

小さな支え合いの心が 地域の大きな力に



「まるっとやまと」の編集会議の様子。隠れた人材や地域資源を発掘する場にもなっています。



平成25年10月から毎週水曜日に欠かさずことなく開いている「かのみずわじまサロン」。地域のみなさんが心を通わせる拠りどころとなっています。

の無料送迎に取り組んでいます。きっかけは移住した時にお世話になった隣に住む独居のおばあさんへの恩返しをするためでした。歩行が困難なおばあさんの生活の足として役に立ちたいと『いとしろサロンカー』を始められました。廣中さんは、移住前に神奈川県川崎市で暮らししていました。東日本大震災を経験し、大きなシステムに依存しない暮らしの在り方を模索する中で、自然エネルギー事業に地域で取り組む石徹白と出会いました。「この流れに参加したい」と移住を決意し、平成27年より「NPO法人やすらぎの里いとしろ」にて高齢者移動支援活動を開始しました。「始めるのは簡単ですが、大切なのは継続させることです。この活動を持続可能なものにするには収益を得る仕組みが不可欠となります。石徹白だけでなく、エリアの広がりを意識しながら、地域とともに育てていきたい活動です。」と話されました。小さな支え合いが、地域に必要とされ「大きな力」になっていくと感じられる取り組みでした。

市民の声を拾い地域の活動を集約・発信

大和地域で活動をしている「NPO法人コミシス郡上」では、行政だけではできない「公の分野」での取り組みを中心に市民協働の担い手として活動しています。市役所大和庁舎での総合案内やロビーを活用してのサロン、キッズコーナーの開設の他、地域のつながりを深め子どもた

ちを育てる「吹奏楽合同演奏会」の開催に協力してきました。今年の8月には、大和地域協議会の発案で、商工会大和支部、大和観光協会、大和地区社会福祉協議会、大和地域公民館など各種団体が連携し、大和地域の話題を網羅した情報誌『まるっとやまと』を創刊しました。『コミシス』は、その編集発行を担っています。理事長の畑中修一さんは、「総合案内に立ち寄り地域の人の生の声や小さなささやきを拾い、一緒に考え、時には行政に届ける。『コミシス』はその役割を果たしてきました。こうした活動が『まるっとやまと』の発行へとつながっています。」と話されました。地域の人たちと情報を

共有することで一体感を高め、関係者の役割分担を明確にして課題解決にあたる活動は、「小さな拠点とネットワーク」を進めるうえで基本となる部分です。「NPO法人コミシス郡上」の今後の取り組みに期待が寄せられます。

郡上らしい「小さな拠点とネットワーク」

郡上市には市街地もありますが、集落の多くは広大な市域に点在しています。現在市で検討している「小さな拠点とネットワーク」は、周辺集落を切り捨て市街地や市街地近郊など中央に住民を集めるといった発想

ではなく、地域づくりなどの活動の活性化により、安全で豊かな暮らしを持続させることを念頭に置いています。今月号で紹介しました「集まる場」をつくることや、地域住民の日常生活を支える「交通手段」を確保すること、また、地域の活動や将来の方向性などより多くの地域住民が「共有」する活動など、これらはすべて「市民主体」が基本となっています。「小さな拠点とネットワーク」という意識はなくても、既に動き出している活動が市内には多くあります。市では、人と人との結びつきを核とした「コミュニティ」など、特徴を活かした郡上らしい「小さな拠点とネットワーク」の構築を目指していきます。

法政大学 現代福祉学部
福祉コミュニティ学科
教授

なおよ
ずし 関司直也さん



10月29日に市の職員研修において小さな拠点とネットワークをテーマにご講演をいただいた法政大学教授の関司直也さんに意見を伺いました。

みんなで知恵を寄せ合い暮らし甲斐のある地域に

「大切なことは、地域で暮らすことの意味を問い直し、みんなが誇りを持てる地域として次代にバトンを渡すこと」です。「小さな拠点づくり」は、エリアありきではなく、日々の暮らしを営む社会の中で、自立して継続的に地域づくりに取り組む必要があります。地域の活動は誰かがやる「他人ごと」から「自分ごと」に、そして「地域ごと」へと繋ぎ直す作業も大事であり、地域づくりに対する想いの部分は共有しながら、仕組みの「棚卸し」を必要に応じて行うとともに、「暮らし甲斐」がある地域にしておくため、みんなで知恵を寄せ合う場づくりが小さな拠点づくりの第1歩になります。

未来志向で考えることが「小さな拠点とネットワーク」にとって大事な要素になることを改めて認識しました。